「浜寺水練学校150年の歩み」

毎日新聞社浜寺水練学校　名誉師範　伊佐美璋子

皆様こんにちは。浜寺水練学校の伊佐美と申します。橋爪先生が浜寺公園全体について素晴らしい講演をしてくださいましたので、私からは浜寺水練学校に絞った話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

橋爪先生からありましたように浜寺公園は日本で初めての公の公園です。昭和初期には別荘地としても浜寺が大きく広がっていたということでした。戦後には米国駐留軍が別荘を借りて住んでいたという話もかねがね聞いております。

浜寺水練学校の元となる浜寺海水浴場は大阪の毎日新聞社と南海電鉄が設立したと聞いております。そして先ほどからは初期のころの浜寺海水浴場の写真を見て、今では危険性の観点から考えられない飛び込み台や海上ブランコがあったのだなと感じました。あんな危険なこと、今では絶対にやらせてもらえないものだと思います。今は危険を排除して安心第一で設計された施設がほとんどですが、当時は皆さんがものすごく楽しんで海上遊具で遊ばれていたようです。

これは毎日新聞社の浜に建てられていた事務所です。昭和初期のころまで、毎日新聞社がこの事務所でいろんな仕事をされていました。事務所の奥に見えるのが海の家で、食事をしたり睡眠をとることができました。海の家は夏が過ぎると撤去され、夏が来るとまた建てられました。

次は浜寺水練学校の生徒が集合体操をする写真です。毎日新聞社の写真特報という記事の一部なのですが、これほど揃った集団体操をする風景は今ではなかなか見られないです。次はとても楽しい写真です。これは海の上にある舞台の写真です。海上ステージと呼ばれていましたが、いろんなショーをやっていてこんなに多くの人がステージを見に来られていました。私たちは浜寺水練学校で授業をしていたので、中々このステージを見に来ることはできませんでしたが、遠目ですごく盛り上がっているなと眺めていました。

次の写真は毎日新聞社のマークが見えますが、これは毎日新聞社の海上飛行機なんです。先ほどの海上ステージ周辺を飛行機から撮影した写真です。後方にはいろんなお店やテントが見えます。例えば、がっちょ釣りや関東炊き（おでん）の店がありました。当時は長い砂浜に関東炊きの店などが並んでいて良い匂いがぷんぷんしていたのを思い出します。

次は浜寺水練学校の昭和初期の授業風景です。これは海辺でバタ足の練習をしています。当時は写真のとおり男性の先生も全身水着を着ていて、生徒たちは褌（ふんどし）を着用していました。この褌を巻くのが中々大変で、生徒だけではうまく巻けないので、先生が手伝ってようやく着用ができた思い出です。そうしてようやく巻けた褌も、水に入ったらほどけてしまうということも多々ありました。波打ち際で練習しているのは、まだまだ泳げない子達でした。海というのは深さが一定なわけではないので、波打ち際での練習はなかなか難しくて、波が来ると泳いでいる子たちが波にさらわれて沖の方に流されてしまいます。そのため先生たちは波が来ると男の子の褌をもって波打ち際にバーンと放り投げていました。そうして子どもたちの安全を守っていました。５割水泳を教えて、５割子ども達の命を守っている、そんな授業でした。授業を経てどんどん泳げる子ども達が増えてきて、本当にたくましい子ども達だったなと感じます。

次は授業前の生徒全員での体操の風景ですが、この人数がすごい人数で一時は6000人ほどの子どもたちがいました。少しずつ人数は減ったりもしましたが、毎年多くの子どもたちが集まってきてくれました。

これは浜寺中学校の一年生の水泳講習会の写真です。中学校の生徒が浜寺に来て、浜寺水練学校の先生が泳ぎを教えていました。中学生の皆さんも褌をしていますが、この時も褌をしたことがない子がたくさんいて大変だったのではないかなと思います。今はプールになっておりますが、夏の初めに清風中学校の生徒さんが浜寺プールに来て、浜寺水練学校の先生が授業をしています。

これは飛び込み台を使って、飛び込みの練習をする風景です。プールは深さが一定なので飛び込みの練習をしても安全ですが、海は潮の満ち引きで深さが変わるので、いざ飛び込むと思っていたより深さがなかったということがよくありました。

これは先ほど橋爪先生のお話にもありましたが、後に高石町長となる中尾保さんが浜寺水練の師範をされていた時の写真です。中尾保さんだけでなく、浜寺水練学校にはいろんな技術をもった先生がいて、各先生が得意な泳ぎに関して授業をされていました。授業の後、海に出て教わった泳ぎを夢中で練習していると自分が何セットこなしたか分からなくなります。そんな時、ふと沖の海上から振り返ると浜寺水練学校が遠くに見える、そんなエピソードもありました。

これは何か分かりにくいと思いますが、浜寺水練の遠泳試験の写真です。泳げるようになり上のクラスに進むと、遠泳の距離が長くなり、みんなで列を組んで泳ぎます。クラスによって泳ぐ時間や距離が決められていて、最後の卒業試験の科目には一万メートル遠泳が課されていました。先生が横について一緒に泳ぎますが、遠泳の授業には必ず集団の前に伝馬船が来ていました。ベテランの船頭さんが伝馬船に乗っていて、方向や時間を指示してくれていました。伝馬船の役割で最も重要なのが、潮の流れを読むことでした。何十分も一生懸命泳ぐのですが、潮の流れに邪魔されて全然進まないんです。一定時間泳ぐと合格ということになり、船頭さんに指示してくれる方向に従って、浜まで泳いで帰りました。一日中泳いでいるので、砂浜に帰るとへろへろで立って歩けませんでした。

遠泳のエピソードはもう一つあります。１９４７年（昭和22年）に浜寺公園が米軍に接収され、駐留軍の居住地になってからは、遠泳から浜辺へ泳いで帰る際に、駐留軍居住地の前の浜辺には決して上がってはいけないと言われていました。間違えて駐留軍の居住地の前の浜辺に上がってしまうと憲兵にこっぴどくやられたという話が残っています。

１９５８年（昭和33年）に全面返還されてからは、海水浴場に出るためには浜寺駅から続く３ｍ幅の通路が作られており、そこを通って海水浴場へでるように指示されました。１９５４年（昭和29年）に海辺だけが接収から返還されましたので、この通路は実際には１９５５年（昭和30年）に完成していました。

全面返還の４年後には、工業地帯を設立するために海が埋め立てられます。海辺が返還されて久しぶりに浜寺の海で泳ぐとなぜそうなってしまったかすぐ納得しました。駐留軍の居住地からいろんなものが流れ出ていて、海に浮いていました。汚いという言葉では言い表せないほどの海の状態でした。ですから工業地帯として埋め立てられるのも仕方ないことなのかなという気持ちもその当時ありました。

１９６２年（昭和37年）には浜寺の海はなくなりました。写真は、浜寺水練学校が羽衣海水浴場の方で、海水浴場としては最後の授業をしている風景です。

最後に面白いなと思った写真を紹介します。浜辺が盛況している写真なのですが、白黒の写真に色を塗った写真です。当時の昭和の浜寺の海を楽しんでいる姿、波打ち際の様子も本当に綺麗で、当時の様子がよく分かる写真です。

このような浜寺水練学校の歴史。この中にはちょっと自慢できることもあります。現在、水泳と言えばクロールが一番の泳ぎだと思われている方もいらっしゃるかと思いますが、かつては日本人の多くがクロールで泳ぐことができませんでした。それはアメリカの選手のクロールと競っても敵わなかったからです。当時浜寺水練学校が日本で初めてクロールを取り入れました。結果、クロールを日本水泳の泳法の一つに昇華させ、日本選手権でもクロールで一位になる選手も輩出しました。今は世界水泳やオリンピックがありますが、いろんな場所で様々な形で卒業生が活躍しています。

その中でも名前を分かっていただけるのは、高橋清彦先生です。今はアーティスティックスイミングと名前が変わっておりますがシンクロナイズドスイミングを日本に取り入れるきっかけをつくった方です。

元々浜寺水練学校では、大正の頃から浜寺名物として日本泳法の伝統的な泳ぎである抜手、舞鶴、伝馬、鴎泳などを一つの流れに組み立て、号令や笛の合図で集団演技する「」という水中演技がありました。

昭和25年当時、扇町公園に大阪プールが建設され、戦後第一回日米水上競技大会が開催されるということで、エキシビジョンで楽水群像を披露することになりました。以前から海外のシンクロに着目していた高橋先生は、「太鼓や笛では困る」いうことで音楽と水泳を融合させた新しい楽水群像を披露しようと提案されました。それからメンバーは毎日、学校や仕事が終わってからプールに通い、振付を作っていきました。

「楽水」の方が出来上がり、宝塚歌劇団の高橋廉先生に作曲をお願いし、新しい楽水群像が完成しました。そして来る８月１日の大阪プール開場日に新設された大阪プールで、一万人以上の観客の前で演技を披露しました。

今では考えられないですが、その演技の際には高価な純毛（ウール）の水着を着て演技をしました。私も演技に参加していたので、濡れた純毛水着がすごく重かったのを覚えています。

お話した通り、高橋先生は当時アメリカで行われていたシンクロナイズドスイミングに目を付けて、それをしっかりと日本に引っ張ってこられた先生です。そして高橋先生の一番の目標はシンクロナイズドスイミングをオリンピック種目にすることでした。ただ、それにはやはり一年を通じて泳げるプールが必要でした。当時、一年中泳げるプールはありませんでしたので、高橋先生はご自宅の庭に窓付きのプールを作られました。そのプールでシンクロのオリンピック選手が生まれることになりました。

そしてシンクロナイズドスイミングが初めてオリンピック正式種目となったロスオリンピックでは、浜寺水練学校の選手やコーチが参加しました。高橋先生の大きな目標が叶った瞬間でした。そのコーチの中には、少し前に世界水泳で日本が金メダルをとった際にコーチとして活躍しておられた井村コーチがいました。本当に頑張ってロス五輪に出場し、思いの丈を演技として披露し、涙した思い出がこみ上げてきます。

現在何人もの浜寺水練出身のコーチが世界で活躍されています。７月にありました世界水泳をこの目で見てきましたが、頑張っておられるコーチがたくさんいることを非常にうれしく思います。

　これから第116回 浜寺水練学校に向けて頑張って参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

（出典：毎日新聞社浜寺水練学校　浜寺水練学校ＯＢ会「水陽会」　※無断転載を禁じます。）